

白川琴水の生涯とその教育思想

一

本稿は、明治初期の女子教育家白川琴水の生涯を発掘し、その教育思想を教育史学の上から検討したものである。もともと、琴水の生涯や著作については、これまでのべたこともあるが、これまでもしばしば本調査について助言いただいた本学図書館の渡辺美好氏より、最近さらに助言いたゞき、また、琴水の生れた高山市願生寺住職白川寿磨氏よりも助言がよせられるなど、のことがあり、ここに、あらためて本稿をものしたしだいである。

白川琴水とは、明治前葉の女流詩人であり、女子教育家である。

「本朝形史列女傳」は、その代表的な彼女の著作である。形史とは、女性史家によって書かれた歴史という意味である。その「列女傳」ならびに琴水の詩集「琴水小稿」については、女子学習院編「女流著作解題」につきのように述べている。

烈▲(多賀云列)女伝 白川幸子編輯、明治十一年制作、本院所蔵、琴水・青木幸子が、明治十年、京都府立女学校辭職の後、編纂したもの。「本朝形史列

多賀 秋五郎

女伝初編・乾坤」半紙本二冊。京都雙玉書樓蔵。明治十二年十二月刻成。菊池三溪及編者自身の序があり、執筆の動機は凡例に見える。自書畫賛と記畫せる如く、女伝の他に評を加へ、漢詩及和歌を詠じ、更に書を自ら描いて挿入してゐる。幸女の才藝を窺ふに足る。

琴水(青木) 漢詩人。飛騨国大野郡大名田の人白川慈攝の次女、名は幸子、安政三年八月十五日生。詩を菊地三溪に学び、才鋒敏妙題咏たるべきものがあれば咄嗟に章を成したといふ。畫を村田香谷に学ぶ。明治十年京都府女学校助教授となり、十二年辭職して、烈▲(列)女伝を編纂、十三年名古屋の人青木與助に嫁し、十七年夫の歿後は畫書を友とし、廿三年九月一日歿、享年三十七。東區正敬寺に葬る。法號釈尼慈恵。その著作に「日本列女伝」⁽³⁾、「鴨西寓草」⁽⁵⁾、「琴水小稿」等がある。

これによって、琴水、およびその著者の概略を知ることができる。なお、女子学習院編前掲書には、琴水の「烈▲(列)女傳」にならべて、三枝斐子著「烈女傳拾遺」をあげ、「傳記に挙げてあるが未見」としてあるが、琴水の「列女伝」との関係は、あきらかでない。また、かつて、蓬左文庫に勤務されていた「閑々子」は、該博な典籍に対する知識をもとに、興味深い随筆をものされているが、そのなかで、

「琴水小稿」も「日本烈(列)女伝」も共に聞くところのなかった書物である。私はそれが一読したくなって、帝國図書館その他の目録に当たって見た。ところが、それらは、明治年間の出版物たるにも係らず、つひに、何処の目録の中に(も)見出すことが出来なかった。

といわれている。女子学習院所蔵本が焼失した現在、殆どみられなくなっていたが、筆者は、最近、琴水の生家高山市岡本町の願生寺でこれを見て、現在住職白川寿磨師の好意で、これを研究することが出来た。筆者は、この両者を中心に、女流文学者としての白川琴水と、女子教育者としての白川琴水の、文学史上における地位と、教育史上における地位とを考察し、かつ、人間としての白川琴水を追及してみたいと思うしだいである。

二

琴水の詩は、「東瀛詩選」に採られていることで著名である。この書は、日本の各詩人の小伝をしるし、各詩について、その巧拙を論評したものである。これには、林羅山・伊藤東涯・石川丈山・琴生徂徠・新井白石・頼山陽など日本の代表的な漢詩人の詩がつらなっている。そのなかに、女流詩人琴水の詩が加わられているのである。これには、岸田吟香(一八三三—一九〇五)が関係したといわれるが、ともあれ、彼女の詩が、清末の中国文壇にまで知られているのである。

「東瀛詩選」の撰者は清末、光緒二十二年(一八九六)に八十六歳で歿した龔樾(字陰甫・号曲園)である。龔樾は、道光三十年(一八

五〇)に科挙に合格して進士となり、咸豐五年(一八五五)に河南學政提督となり、張之洞とならび称せられた。古学を学んだが、晩年は公羊学も学び、その書室を春在堂といったところより、著作集を春在堂全集といい、その巻数は五百余巻に達している。彼の詩は、温和典雅で白居易に近いといわれ、曾国藩・李鴻章・彭玉麟・潘祖蔭らとも親交があった。この中国で当時高名の知識人の、白川琴水の詩に対する評価は、その巻四〇に、つぎのようにしるしている。

白水幸^(マ) 字友之、號琴水、飛駝人、詩見 閨媛吟藻、琴水頗工古體、在閨媛中、若難得者、有紅絃餘唱四首、似歌似謠、音節絕異、序云、聊學國風遺韻、殆類於彼國所謂和歌者乎、然情致纏綿、頗得風人之意、題下有小注數字、末一字不可識、蓋彼國所謂普同字也、今既不識、姑削之。

すなわち、白水幸は、字を友之、号を琴水といい、飛驒の人である。その詩は、「閨媛吟藻」という詩集に出ているが、琴水はすこぶる古体にくみで、閨媛中에서도得がたい人物であると評している。なお「紅絃餘唱」四首がある。それについては、「これは歌謠に似たもので音節がすぐれて異なっている。序に、いささか国風を学んで韻を遺すといっているが、国風とは、日本のいわゆる和歌のたぐいであろうか。しかし、情致纏綿として、すこぶる風人の意を得ている。」と述べている。そこで、「東瀛詩選」にみられる張良の「圯上捧履図」・「清少納言牽簾図」の二首と「紅絃餘唱」四首をしめすことにする。

圯上捧履図

笑把錐鐵冒萬死 副車一擊噫危矣 圯上老人神耶仙 折他孺子忍小耻

君不見

漢家鴻基四百霜 拏而捧之輕於履

清少納言寒簾図

曾聞

永筵宮中多佳人 六宮才藻孰絕倫

瑤階雪滿曉如玉

翠簾未褰映紅旭 誰奉

詔者清氏姬 才名一朝驚凡俗

嗚呼

女不在才須在貞

嫌他小慧累平生

別有紫氏君知否

三寸彤管曲盡古今情

紅絃餘唱

啾啾黃鳥鳴春、嚶嚶草蟲語秋

聊學國風遺韻

以奔彤管餘輝

然乏嫺然

之致 而不免形似之嘲也

花紛紛 雪霏霏

清香私來不沾衣

妾待郎 郎待否

昨日春色今日違

園池水寒袞欲凍 可憐鴛鴦合歡夢

一聲間斷半夜鐘

疏簾忽向枕邊送

情緒

纏綿亂如絲 幾行紅淚灑泳肌

躬可死兮愛不可割

浮生從頭一條葛⁽¹³⁾

妾思

妾思紛紛如髮亂

髮亂尚可理 妾思紛紛不可斷

相見多別亦多

雙枕雙枕如⁽¹⁴⁾

汝何 孤衾擁來聊相伴

無情鐘聲過夜半

昨夢今朝再難結

唯恐昨日髮成雪⁽¹⁵⁾

春雨

春雨其濛濛

梅花枝上羽亦香

可憐鶯情切

梅邊戀戀不忍別

鶯也似妾⁽¹⁶⁾

郎也梅 鶯宿梅今何時開⁽¹⁷⁾

杜鵑啼

杜鵑啼兮何処之

夏山朦朧路多岐

幾度啼破紅閨夢

正是遠人未歸時 午夜

酒醒無消息 曉鴉數聲殘月仄⁽¹⁸⁾

この詩のことは、前掲も述べているように、「日本閨媛吟藻」であ

る。「日本閨媛吟藻」は、明治十三年に東京で刊行された書物で、その下巻に採録されているものである。同書同巻には、そのほかに、つぎの詩が収められている。

新年作、与友人分韻、得青字

送舊新還到

曉光照客遲

滿城人作海

連戶幟如星

月魂纔留白

柳城未返

青 不愁春信遠

床上有梅瓶

梅花

当出瑤台裏

江南甘垂華

誰言售孤艷

或恐比凡花

香帳佳人夢

清溪処士

家 模來写真手

暮月上窓紗

追次高啓之韵

羅綺水之東

治生又醉翁

蹄輪粧自異

摩挲步難通

酒影樓々火

鐘聲寺々

風 却疑春已到

身在柳烟中

又

閒居未足誇

青苔暎白沙

月暈天心雨

梅香墻外花

靜中初得句

夢裡幾還

家 春淺柴門寂

無由逐物華

秋日書懷

鴈去燕來秋已殘

客衣初覺帶圍寬

吾師不得孳翁履

寄鮮何時供母餐

蔬圃

新霜晨炊懶

書窓缺月夜吟寒

憐看一朵瓶中菊

纔出東籬甘小女

彼女の詩は、やはり中国人陳鴻誥の「日本同人詩選」にも採られている。この書は、蓬左文庫に現存し、琴水の絶句八首が採録してある。これは、「鴨西寓草」という現在原本所在不明の著作から採ったようである。

白川女史・幸 号琴水、飛騨高山人 著有鴨西寓草、工繪事

題書

峭壁高於鳥 流泉響似琴 仙竇尋不得 一路白雲深
春雨

梅花落尽雨如絲 銅鴨煙消冷翠帷 啼鳥不來春寂寞 小窓明処説唐詩

山城寓居雜詩

客窓秋夢夜淒清 雁語帶霜寒洛城 月在天心故山遠 誰知今日倚門情 脉々

寒威侵玉肌 依微燈影遠羅帷 管絃聲歇鄰樓寂 正是圓山月落時

即景

柳色朦朧煙未開 橋頭微月影徘徊 前汀知有梅花發 一脉香風渡水來

木屋町寓樓

落月銜山光在波 露簾風檻映青莎 壳蟲人向橋頭去 夜半秋聲入耳多 晚來

先上水辺樓 微月纖雲已早秋 何限清光何限恨 今宵誰是不知愁

題畫

水色茫々望欲虛 寓株楊柳擁茅廬 桃花紅滴春江晚 煙雨磯頭釣鱖魚

これに対して、陳鴻誥の評が上欄にあるが、「春雨」には、「詩筆清秀、不染塵氛、是席佩蘭金纖々、一流人物」、「山城寓居雜詩」前詩には、「思親之情、溢於言表、非奔月吟風可比」、後詩には、「不事雕琢、氣息自厚」、「即景」には、「神韻悠然」、「木屋町寓樓」には、「工於寫景、婉々可誦」、「題畫」には、「詩中亦有画、可為丹青生色」と評している。⁽¹⁸⁾ 琴水の詠詩が、清代の中国でも、高く評価されていることがわかる。

こうして、中国人から高い評価を受けている琴水に対して、日本ではどうかというと、この点について、久保天随は、つぎのように述べている。

明治中、⁽¹⁹⁾ 閩州絶無能詩者、而白川琴水独為巾幗大吐氣、尤可稱異也、琴水、名幸、字友之、高山郭外願生寺主慈弁妹也、嘗從兄、至京都、贅詩訪成島柳北于其旅寓、柳北一見稱其才、勸入菊池三谿門、從學多年、詩文兼達、又工繪事、所著有琴水小稿、既刊、其京寓中所得、曰鴨西寓草、別有日本烈女傳二卷、行于世、後適名古屋富人青木氏、舉一男一女、尋歿、才媛短命、洵可惋惜也、其女亦有才藻、善和歌、曩得新年敕題予選之榮云。三溪嘗評琴水詩曰、才鋒銳利、如昆刀切玉、一当百碎、触者悉斃、其詩皆清麗瀟灑、不失其本領、時有盤空硬語、以驚座人、予每評其詩、以曹娥碑背八字、其詩多見聞媛吟藻

そうして、「俞曲園、采數首、載于東瀛詩選、陳鴻誥、日本同人詩選、亦錄七絶八首、其數共不在他家下」といい、「圯上奉履圖」の詩については、「勁氣直達、眞得百鍊剛、鬚眉丈夫、亦恐不及」といい、「清少納言塞簾圖」については、「何等精切、何等沈靜、可見識力高人一等、在昔紅蘭洲夢輩、稱女學士之翹楚、而琴水之才、何亦相遜哉」といい、また、「絶句多輕荷可愛者」と評している。⁽²¹⁾

三

白川琴水を生んだ文学的環境について、昭和二年（丁卯）に飛騨へ遊んだ久保天随は、⁽²²⁾ こういつている。すなわち、飛騨高山へ至る間の景勝について書いた文は、曾我耐軒の「幽討餘録」以外聞くところがなく、細川十洲・土屋鳳洲・近藤南州などの遊記があっても、注目に値しない。その詩も、遠山雲如の「棧雲集」や森春濤の「高山竹枝」があるけれども、文学的に格調の高いものでないし、館柳灣・貫名海

屋・中島棕軒・広瀬旭莊・鱸松塘・(前田)林外・広瀬青村らの詩も、伝えるほどのものを詠んでいない。江村北海が飛騨では良材を出し、高山は殷富で、伎芸を重んじたが、文学も明和頃から興つたといっている。天明・寛政の頃、赤田臥牛(元義)が出て、北海や松平君山とも交わり、飛騨最初の学校「静修館」を開設して生徒を教えた。彼は、書や詩文にもすぐれ、「臥牛集」十巻があり、「東瀛詩選」には、四十余首もの詩が採録されている。臥牛の漢詩・田中大秀の和歌・加藤歩簫の俳句があらわれ、飛騨の文雅はみるべきものとなった。臥牛の子章齋(先暢)は家業を継承し、孫誠軒(昭)がこれをついだ。劉冷窓もいうごとく、赤田氏は、三代にわたって郷校で教授し、多数の門生を出した。しかし、誠軒は高山県知事梅村速水の政治をいさめたけれども、聴かれないので、静修館を閉じ、高山を去って、金沢で客死した⁽²³⁾。というのである。この久保天髓の飛騨文教史には、若干如何かと思われるふしもあるが、だいたいにおいて、琴水出現にいたる文学的環境が、要領よくまとめられている。飛騨の漢詩発達に貢献した赤田臥牛の影響力は大きい、その臥牛に、願生寺十九世了堯が漢詩を学んでいる。

琴水は、安永三年(一八五六)八月十日の出生、了堯は、天保十一年(一八四〇)十二月二十一日の逝去であるから、その間、一六年ということになる。琴水の父は、願生寺二〇世慈攝で、長兄を慈孝、次兄を慈辨、慈攝の姉を露といった。願生寺は、飛騨国大野郡灘郷下岡本村(現高山市岡本町)にあった東本願寺派(照蓮寺末)の寺院であ

る。兄慈孝は、劉石舟について漢詩を学び、号を静山といった。文久二年八月、父から住職を譲られ、願生寺二世となったが、明治七年十月十五に、三二歳で逝去した。その詩集を「聴雪寮遺稿」というが、聴雪寮とは、願生寺に今も残っている書室の名称である。静山の「廃寺聞鶯」の一詩を左にしめすことにする。

廃寺聞鶯

石仏跌跏苔色青 松風蘿月入禪局 空林唯有山鶯在 朝夕綿蠻誦妙經
次兄の慈辨も、漢詩にすぐれ、明治十年、西南の役が起ると、大谷勝縁に従い、従軍僧として赴く途中、馬関海峡や天草灘で、つぎのような詩を詠んでいる。⁽²⁶⁾

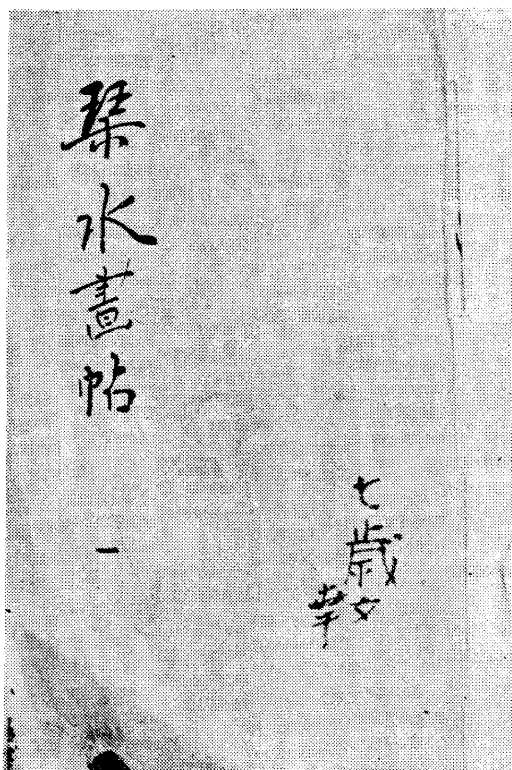
丁丑六月赴九州曉廢赤馬関

山影水光望漸分 曉鐘何処數聲聞 蒸煙漠漠濃於墨 文字関頭凝作雲
過天草洋

前洲是雨後洲晴 天草洋中暮靄生 頼子有詩誰記得 篷窓落日水禽鳴

しかし、彼は、九月一日、三二才で、戦場の犠牲となっている。⁽²⁷⁾そのため、慈攝は、住職に復し、願生寺二二世となったが、間もなく、明治十三年六四歳で逝去している。以上述べたように琴水の文学的環境からみて、彼女は出ずるべくして出でたともいえる。

「琴水小稿」は、黄色の表紙に白の題簽を張り、和装・縦一八糎・横一三糎・序文二葉・本文九葉の鉛印本である。組みは、半葉二〇字八行となっている。巻頭・題簽・版心ともに「琴水小稿」とある。奥付がないが、「琴水小稿序」に、「明治九年丙子三月三十又一日、識于



西京枳殻坡僑寓、三溪老人菊地純」とあるので、その成立年代は知られる。菊地・三溪（一八一九—一八九二）は、和歌山藩の藩儒や幕府の儒官をつとめたことのある人で、その詩文集に、「晴雪楼詩鈔」・「京葉集」・「三溪文抄」などがあるが、「近事紀略」・「国史略」など、歴史に関する著書も多い。琴水の師である。巻頭の下には、「飛驒・白川幸、友之」とある。

四

琴水の生涯について、(一)少女時期、(二)初婚時代、(三)京阪時期、(四)再



婚時期に分けて考察してみたい。

(一) 少女時期 琴水、すなわち幸は、安政三年八月十日に、飛驒国大野郡灘郷下岡本村（現高山市内）の願生寺に、二〇世慈攝の子として生れた。⁽²⁹⁾ 母は吉城郡下高原郷西村（現神岡町内）の大国寺一五世明照（一七八二—一八七二）⁽³⁰⁾ の女である。慈攝の父は了堯（一八〇六一—一八四二）、母は益田郡下呂郷少ヶ野村中川武右衛門の女である。幸の兄慈孝・慈辨のことは既述したが、なお叔母の露は、山下氏へ嫁している。幸は、幼少から「天資妍秀、才情絶人」で、「五才読書、粗通其理義」とか、「七才作韻語」とかいわれる。⁽³¹⁾ また、絵画をよくし、

琴水画帖（高山市下岡本 願生寺蔵）

1953・10・23撮

すでに、七歳・八歳の時の画帖が二冊、願生寺に保存されている。⁽³²⁾ いずれも、初歩的な模写画であるが、非凡な画才をしめしている。各画帖には、幸女・琴水・琴水女史などと自署している。当時の高山には、松村梅幸（一八一五—一八六四）・白雲居（一七八五—一八六八）・垣内右隣（一八三五—一八九二）をはじめ、津野悟窓（一八三五—一八九五）・杉下苔石（一八二二—一八七五）・奥村桃村（一八二六—一八八九）など、絵画にたくみな人が多くいて、絵画流行の気風がもりあがっていた。

(二) 初婚時期 才女幸は、文学的にめぐまれた環境のなかで成長したが、十三才の時に、その運命を大きく換える事件が起ったのである。それは、彼女が、時の若い高山県知事梅村速水の妻に迎えられたことである。このことは、核村知事に仕えた地役人筆頭吉住禮助が、その著「梅村騒動實記」のなかで、「願生寺娘モ、御側遣ニ被出ケルガ、秋風立、親里へ帰ケル」と書いている。同書によると、願生寺の娘を迎える前、「加州表富山ニテ、去ル武家ノ娘、貰受ニ相成、入陣有リシガ、是モ一兩月ニテ親里へ取戻シ相成ル」といい、また、願生寺の娘の去った後には、下原村笹屋彌助の女つるが「富陣内へ入来せ」られると記している。つまり、梅村知事は、三人の女性と関係があったわけで、その第一が富山の女性、第二が願生寺の女、第三がつる女ということになる。しかし、これらの女性との関係は、複数の女性と同時的關係をもったものではない。つまり、「嬖」とか「側室」とかいふものでなく、梅村は正室として迎えている。だから梅村は、妻子あ

る身で、合羽屋らくと通じた吉住禮之進（禮助の子）を、官紀肅正の立場から許せなかったのである。禮助は、これ以来、知事排斥潜行運動の県庁内中心人物となっている。それで、彼は、梅村を評して、「實ニ淫乱ノ生得ニテ、国政ニ預ル人態ニ非ズト、諸人舉而誹謗申ケル也」といつているのである。しかし、禮助は、願生寺の女とだけしか記していない。これだけでは、それが琴水だったとはいわれない。そこで、もうひとつの根拠をしめす必要がある。それは、やはり、反梅村知事派の有力農民大坪二市⁽³³⁾の書いた記録である。二市は、

知事梅村速水嬖

初 ひな女 越中国八尾住人医師娘 廿二・三歳

中 幸女 岡本村願生寺娘 十三歳

末 つる女 下原町笹屋彌平（助）娘 十八・九歳

としるしている。⁽³⁴⁾ これによって、琴水十三歳の時ということが明確である。安政三年に生れた幸女は、明治元年に十三歳⁽³⁵⁾なのである。二十六歳の青年知事と、十三歳の飛驒の名刹の才女との結婚は、当時の風習として、つりあいのわるいものではない。それでは、どのくらいの期間、幸女が陣屋内にいたかという点、それほど長い期間とは思われない。なぜならば、梅村速水が飛驒へ来たのは、慶応四年三月三日、梅村が富山へ出張したのが、七月二十九日、帰国したのが八月十二日⁽³⁶⁾で、この時越中の医師（武家ともいう）の女を連れて帰り、一兩月いっしょにいたというから、その離婚は九月中頃と思われる。そうして十月末には、つる女を迎えているのであるから、幸女との夫婦関係は、



琴水の初婚者・高山県知事梅村速水
(高山市高岡写真館原板所有) 1929, 著者のため複製

きわめて短かったといわねばならない。⁽³⁶⁾

(三) 在京時期 結婚に失敗した才女幸は、兄たちが往復していた京都へ行くことになった。その結婚の相手だった高山県知事梅村速水は、飛騨最高の権力者であったが、京都出張中、明治二年二月二十八日に、騒動が勃発すると、帰庁の途次、萩原から国外へ追い出されてしまったのである。梅村に離縁された幸女に対するこの国の人たちの視線は、複雑であった。彼女は、これを避けて、京阪へ行くことになったのである。京阪の地は、彼女の才能を発揮させることのできる地でもある。菊池三溪は、「女史(琴水)飛騨高山之産、其地萬山環抱、僻在一偏、



琴水筆列女傳挿画

乏良師益友、女史^{うらむ}憐之、乃弓鞋千里、負笈浪速、就学西籍、粗通其義⁽³⁷⁾といっている。その頃、京都東本願寺の高倉学寮では、明治二年の「春講」が行われ、講師は、高山の真蓮寺荷洲で、彼は、「執持抄」を講じた。そのあと、この年の「夏安居」の講師賢殊院得住の講義に対して、学生の騒ぎが起り、ついに、高倉寮は閉鎖された。⁽³⁸⁾当時、東本願寺派の碩学として信望を集めていたのは、越前憶念寺の南條神興であった。白川慈孝・慈辨はこれに師事し、仏学を修めた。この慈孝・慈辨兄弟は、大谷勝縁と深い関係を持つことによって、本山内でも改革派として活動することになる。勝縁は、慶応四年四月二十一日、高山

照蓮寺へ行って朝廷への献上募金を行い、三千両余の志納金をもって、閏四月七日に、高山を発し、帰京の途についている。その後、勝縁は、明治三年三月六日に、高山の照蓮寺住職となって入寺している。彼は、寺内に学場を開いて末寺僧侶の再教育を行うとともに、飛驒の避地白川郷や益田・山口村筋などへも出張して布教につとめたが、同年閏十月六日高山を発して帰京している。当時本山では、改革派の運動によって「改正係」が設置され、それに、慈孝が任命されているのである。改正係は、慈孝のほか、円覚寺順明・願隆寺大船・法因寺契設・永順寺舜台らが任命されている。⁽³⁹⁾これを統括する「改正総長」、すなわち改革派の首領は、大谷勝縁であった。大谷勝縁は、霊寿院といい、東本願寺当主現如の弟で、近江長浜の別院大通寺にいた。「改正係」には、「助勤」という助役が設けられ、それには、⁽⁴⁰⁾南條文雄（一八四九—一九二七）と、願生寺慈辨が任命されたのである。この慈辨との交友について、文雄は「懷旧録」のなかで、こう記している。すなわち、「五人の改正係りといっても、五人揃ってることとはほとんどなかった。中にも願生寺慈孝という人は病人であったから、めったに寺務所へ出たことはなかった。それで後には、弟の慈弁を代わりに出していた。私はこの人とは非常に仲がよくて、真の兄弟のようにしていた。ただ酒癖が悪くて、酔って来ると喧嘩を売りがるには弱った。のちに性を白川と名乗った。この人には一人の妹があつて、やはり飛驒から京都に出て来ていたが、詩もやれば絵も描くという器用な女で、いまで言ういわゆる才媛であった。白川慈弁君はその妹が自慢で、愚

妹愚妹と鼻を高くしていた。自分と仲のよいところから私にその愚妹をくれるということであつたが、見るところどうも末長く納まりそうにないので私は断つた。妹は白川琴水といって、その後も兄の側にいた。この話は養父にも聞えたらしく、どうせ越前に適当な者があるわけではないのだから、当人さえ希望ならもらつてもいいという養父の言葉が廻わり廻わつて私の耳に入った。もっともこの白川君はもと私の養父から教えを受けたことがあるので、どちらも知らぬ仲ではなかった。不幸にしてこの人は、私が海外へ去つた翌年の明治十年の秋、非業な死をとげた。⁽⁴¹⁾といっている。琴水の長兄慈孝は、住職を父から譲られたが、蒲柳の身質で、父に先だつて歿し、次兄慈弁も鹿兒島で死んだので、父の慈攝は、再び住職となっている。

琴水が京都へ出た時期は明瞭でないが、明治九年三月三十一日の序文がある「琴水小稿」に、「客裏幾迎新」とあるから、すでに何年か前から上京していたようである。彼女が京都にいる頃、高山から桐山玄豹も上京している。玄豹は、詩をよくし、慈孝、すなわち、白川静山と親しく、「静山上人見訪、乃招吟石共賦」といっている。慈孝が逝去した後、「静山院師小祥忌賦呈肖像下」という一首を手向けている。⁽⁴²⁾玄豹は、明治九年九月に中国へ渡るが、その際琴水らと別れの会で詩を詠んでいる。⁽⁴³⁾また、「名古屋市史」人物編（儒学・漢詩・一七九）は、「青木琴水」について、つぎのようにしている。すなわち、「青木琴水、名は幸子、飛驒大野郡大名田村の人白川慈攝の女なり、安政三年生る、幼にして聡慧文筆を好む、父授くるに漢学を以て

す、後菊池三溪に詩を学び、又畫を村田香谷に学ぶ、明治七年大阪に出でて集成学校に入り英學を修む、十年一月京都府女学校に入學し、又ウエットンに従ひて油畫を學習す。二月皇太后宮、皇后宮の兩陛下より學業優等の賞として白絹一疋を下賜せらる、同年三月天皇陛下下幸、學業天覽の際に、優等の賞として康熙字典一部を下賜せらる。同年三月十七日准六等助教授の命を拝し、二十九日皇后陛下より思召を以て縮緬一反を賜ふ、十一年六月京都博覽會に油畫を出品して、妙技賞銅牌を受く、十二年四月准一等授業補となり、十二月職を辞す、同年列女伝を編輯して宮内省に獻じ、又命に依りて書畫を作りて之を上る。十三年名古屋の人青木與助に嫁し、十七年夫歿するの後、寡居して書畫を以て樂とす、明治二十三年九月一日病みて歿す、享年三十四、正敬寺⁽⁴⁵⁾東區針屋町に葬り、釈尼慈恵と法諡す、著す所琴水小稿あり」というのである。これによると、菊池三溪に詩を学んだのは、集成学校入学以前のように受け取られるが、「琴水小稿序」によると、「笈を浪速に負い、学校へ入って学び、ほぼその義に通じたので、平安の人文のさかんなのを欽慕して、去年、つまり明治八年に京都へ来て寓し、蚕桑の暇に、時に來て詩を予に問った」といつているから、集成学校に学んでからのことであることがわかる。明治七年の十月十五日には、兄慈孝が死去したので、京都へ帰った彼女は、蚕桑に勤め、生活していたものようである。それで、三溪は、「琴水小稿序」において、彼女を紫式部・清少納言と比較し、紫清の文字が宮廷貴族の所産であるのに対し、琴女の文字が養蚕に親しみ、紡績に務める労働の文学であ

る点が異なるという意味のことを指摘している。当時琴水は、鴨川の西、六條あたりに寄寓していたようで、「日本同人詩選」は、彼女の「鴨西寓草」から採ったといっている。彼女は、日本畫を村田香谷に学び、洋画をウエットンに学んだが、洋画の遺作としては、現在、願生寺に、兄慈弁の顔のスケッチと、父慈孝の肖像油絵が残っている。集成学校で英學を修めたが、慈弁の顔のスケッチの空白全面に書かれている英文學は、字体が美事である。京都府女学校とは、今日の鴨芹高等学校の前身、府立第一高等女学校となるもので、彼女は明治十年一月に入學し、三月修業し、三月十七日に助教授となり、十二年末辭職して、十三年に青木与助と結婚した。父白川慈攝は、兄の死後、明治十年に再び住職となっているが、彼は自筆で、「十年丑一月廿八日、今上兩后西京ニ幸ス。同二月一日、白川幸、女学校ニ於テ拜天顏。同九日、兩后臨幸、又拜尊顏⁽⁴⁶⁾。」としるしている。父の叙述は、きわめて簡潔なもので、慈辨の死についても、「明治十九年九月一日、慈辨鹿兒島ニ於テ賊ノ流丸ニ中リ死亡(三十二年七ヶ月)」⁽⁴⁷⁾というのみである。同じ年の同じ月、一男は彈丸に倒れ、一女は光榮に輝くのである。深刻な悲喜の感情が、その簡潔な文字の中にうかがわれる。しかし、それらの月日において、「名古屋市史」と齟齬⁽⁴⁸⁾がみられ、鴨芹高等学校の記録をみる必要がある。そこで、同校の前身、京都府立高等女学校の「創立六十周年記念沿革略誌」をみると、天皇の臨御は二月一日、英照皇太后・照憲皇太后の臨御は、二月九日となっている。つまり、父慈攝の記録が正確であったことがわかる。なお、同誌による



琴水画（油絵） 父肖像（高山市願生寺蔵）
1983・10・23撮

と、この両後の臨御に際し、「生徒に褒賞を賜ふ事差あり。」とあり、琴水が白絹一疋を受けたといわれるのは、この時のことであろう。さらに、同誌に、天皇の行幸に際し、「明治天皇より金五百円、英照皇太后・昭憲皇太后より金貳拾五円を下し給ふ。」とあるが、琴水は、この際、康熙字典を受けたものと思われる。したがって、この日は、「名古屋市史」のしるしている三月でなく、二月一日のことである。さらに「名古屋市史」は、琴水が女学校へ入学した年月を十年一月とし、三月十七日には、准六等助教授となり、十一年六月に京都博覧会へ油画を出品して、銅牌を受けたといっている。



琴水画（日本画） 秋蟹（高山市願生寺蔵）1983・10・23撮

(四) 再婚時期

琴水が青木与助と結婚した明治十三年は、父の死んだ年でもあった。彼女は、夫との間に一男一女をもうけたが、五年にも満たない明治二十三年九月一日に、夫と死別した。その後、子らの成育につとめ、かたわら書画に親しんだが、六年後には、病んで歿した。数え三五歳であった。墓は青木家の菩提寺正敬寺（名古屋市中区針屋町）に現存する。法名は釈慈恵。一女穠子は、母より受けた才氣を和歌に発揮し、大正七年勅題予選に入っており、社会の注目するところとなり、名古屋歌壇の指導者となり、その遺産で短歌会館を建設した。これは、現在、名古屋市教育委員会の管理するところとなっている。

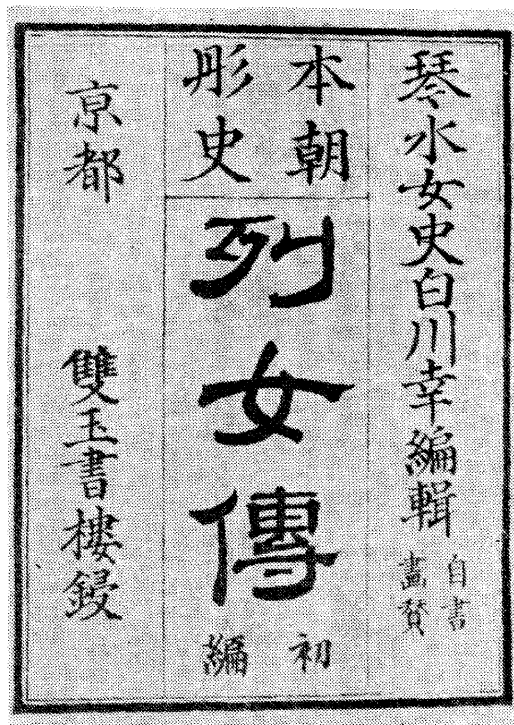
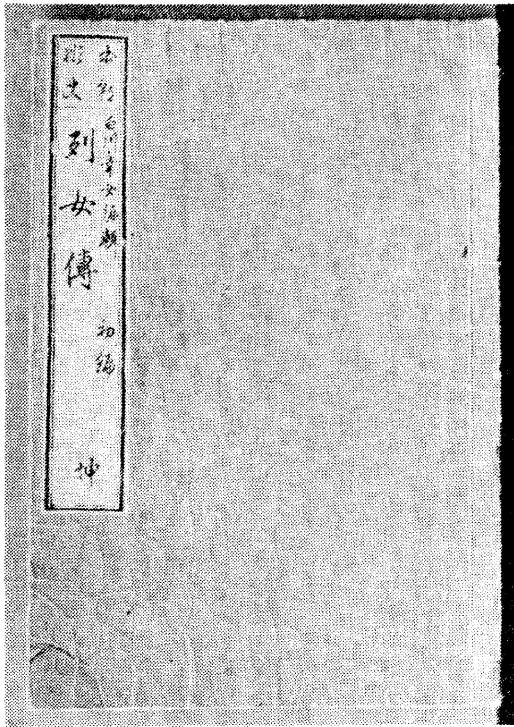
五

琴水の著作「本朝彤史列女伝」（巻頭・目首・版心）は、「本朝彤史列女伝初編」（題簽・見返）、「本朝彤史」（序）ともいい、「白川幸女編輯」（題簽）・「琴水女史白川幸編輯、自書書賛」（見返）「編輯者・岐阜県平民・白川幸・飛騨国大野郡大名田村十四番地」（奥付）とある。縦二三糎・横一五糎・和装・鐫刻・乾坤二冊本である。巻一には孝女伝・貞女伝上、巻二には貞女伝下が収められている。版元については、「京都、雙玉書楼録」（見返）「出版人、京都府下平民、大谷仁兵衛、下京区第五組三條通御幸町角五十四番地。出版人、京都府下平民、杉本甚助、下京区第五組三條通寺町西入弁慶石町六十番地」（奥付）とある。出版年月については、「明治十二年十一月廿五日出版御届、同

年十二月刻成発兌」とある。題字は、「貞風凌俗」（明治十一年戊寅秋日、龍山人）、序文は、菊池三溪（明治十一年戊寅十一月）、凡例は「明治十年夏、飛騨、白川幸、識於平安寓居」とある。そこで、凡例によつて、本書著作の目的についてみると、「幸、毎古今史伝ヲ読ミ、列女言行ニ至リ、其ノ事跡覈實、文詩精妙ヲ嘆ジ、普ク世ノ兒女ヲシテ、緝聞誦読、以テ警勸ノ一助ト為サ使メント欲ス。然リ而シテ、史伝ノ闕富浩翰ナル、恐ラクハ小女兒ノ習誦ニ便ナラザルコトヲ。因テ今其ノ精要ヲ拔萃シ交フルニ国字ヲ以テシ、以テ読史ノ徑蹊ト為セントス。是レ此ノ編ヲ著ス所以ノ謂ナリ。」と述べている。すなわち、本書は、女性史列伝ではあるが、その目的の一は、勧善警惡のためであり、一は、女兒誦習のためであるといっている。つまり、女子の道德教育の教科書あるいは新教訓書を執筆しようという意識によつて成立したものである。それで、著者琴水は、その人物をなるべく現実に近い人物に求め、兒童の感情や興味に訴えるものでなければならぬとして、つぎのように述べている。すなわち、「史乗ノ伝紀ニ於ケル、素リ世ニ較著ナル者而已。今別ニ列婦人ヲ撰スルニ至テハ、乃チ概記ノ失有ラザルコト無カラシヤ。且ツ中葉以前ノ人ノ伝ノ如キハ、間今時ノ人情ニ合セザル者アリ。是ニ於テカ、繁重ナル者ヲ刪リ、又其ノ足ラザル者ハ、之レヲ曾テ觀ル所ノ諸者ニ取り、以テ之レヲ補ヒ、兒童ノ倦棄セザランコトヲ要ス。」と述べている。これは、かつてのこの種のものが、倭姫命や弟橘媛など、兒童生活に何ら道德的感動を催さない人物を載せていたのに対して、もっと近世的な社会に生きて、

その行動が現実の児童の興味にこたえるものでなければならぬというのである。つまり、今の人情に合う人物でなければならぬというのである。そのためには、従来の繁重なものを削り、補うに新教材によらねばならないといっている。それでは、現在の女児に、どんな理想的人間像を望んだか、というところ、それは、孝・貞・賢・忠・才・勇であるとして、本書も、その六編とする予定であるといっている。すなわち、「此ノ編、分ッテ六伝トス。即チ孝・貞・賢・忠及ビ才・勇是レナリ。然レドモ孝ニシテ貞ナル者アリ。貞ニシテ賢ナル者アリ。忠ニシテ勇、勇ニシテ才、六ノ者一ヲ欠ク不可ナリト雖モ、徳ニ優劣

アリ。行ニ短長アリ。才勇ノ如キハ、必ズシモ孝貞ナラザルヲ奈何、只其ノ最モ長ズル所ヲ取り、称ス可キ者ヲ表シ、之レヲ各伝ニ配ス。」といっている。このことは、後の修身教科書が徳目主義に発達する端緒のひとつとなるもので、明治末期に修身教育が、人物主義論と徳目主義論との論争の展開がみられるのである。琴水は歴史を書いているが、実は修身を書いているのであり、人物を書いているが、実は徳目を強調しているのである。それでは、歴史学と修身との関係をどのように考えていたかというところ、「此編詳カナル者アリ。畧セル者アリ。或ハ人口ニ膾炙スト雖モ、疑ハシキハ之レヲ省キ、其ノ事奇ナラズト



本朝形史列女傳（高山市願生寺蔵）

1983・10・23撮

雖モ、聊カ箴戒ニ関スルガ如き者ハ之レヲ挙グ」といって、人口に膾炙していても、史実として疑わしいものは削除し、その事が平凡なことでも規戒に関するものは採取するといっている。つまり、事実でなければ、教訓にならないというのであって、そこには、清代考證学の実證主義的な思想と共通するものがみられる。なお、この本は琴水が版下を書き、挿図を書き、自詠の賛を載せ、論説を挿入している。この点について、凡例で、「編中論贊ノ如キ者、一伝ニ限ル者アリ。数伝ヲ合スル者アリ。大概童蒙ノ解シ易キヲ主トシ、筆ニ任セテ書ス、故ニ其ノ文俚俗、其言言陋固、称誉当ラザル者アリ。或ハ譬短ニ陥ル者アリ。共ニ大方ノ訛笑ヲ免レザルナリ。且ツ人ノ行事ト雖モ編者ノ言ニ關スル有レバ、亦其ノ伝末ニ附記ス」・「其ノ偉行峻節、清操豔才ニ遇フ毎ニ、必ズ詩及ビ国歌ヲ詠ジ、以テ吊古ノ意ヲ表ス。編成ルニ及ンデ、又之レガ畫ヲ作り、併セテ以テ伝中ニ挿入ス。」としるしている。

六

琴水は、凡例で六伝編著の予定であるといっているが、本書は、孝女伝・貞女伝のみである。他の四伝については、知るところがない。孝女伝に、あげられているのは、衣縫金継の女・福依売・橘逸勢の女・舞女微妙・糸女・里也女の六名、貞女伝に、田道の妻・上毛野形名の妻・安部則任の妻・袈裟・源義高の妻・小宰相・佐介貞俊の妻・静・大磯の虎・阿勝・山内一豊の妻・富田和信の妻・細川忠興の妻・小島

喜兵衛の妻・梶浦兵七の妻・霄女・鶴女・阿正の一八名である。この二四名は、琴水が新たに採りあげた女性もあるが、すでに以前より孝貞の女性として、女訓書に採りあげられてきた女性である。その女訓書のなかでも、「全像本朝古今列女伝」の影響が強いようである。この書は、黒澤弘忠の編で、一〇巻・六冊（美濃判）、寛文三年（一六六三）九月、京都の平安書房より出版されたというが（見返）、完成は、寛文八年（一六六九）二月（巻末・刊記）のようである。その分類は、卷一后妃伝（二一人）以下、卷二夫人（二一人）、卷三孺人（三五人）、卷四婦人（五三人）、卷五妻女（二六人）、卷六妾女（二一人）、卷七妓女（二三人）、卷八処女（二九人）、卷九奇女（七人）、卷一〇神女（一人）の各伝となっている。そのなかで、琴水の「列女伝」にもみられる女性には、卷三孺人伝の田道孺人、形名孺人、平貞俊孺人、細川忠興孺人、卷四婦人伝の鎌田婦人、卷五安倍則任妻、卷六養女伝の小宰相、卷七妓女伝の静・大磯虎・微妙の一〇名である。また、「金葉百人一首九重錦」の影響もみられる。この書は、京都の下河辺拾水の著作で、一卷・一冊（美濃判）、天保二年（一八三一）新刻、天保十四年（一八四三）補刻で、本朝賢女鑑の部には、紫式部ら三八名、本朝女二十四孝の部には、吉備兄媛ら二四名、計六一名の女性をあげている。そのうち、琴水の「列女伝」にもみられる女性には、袈裟御前・大磯虎女・薩摩福依売・源義経妻静の四名である。「女教百人一首合鏡」（天保十一年再刻本）によると、形名の妻・田道の妻・鎌田の妻の三人が、琴水の「列女伝」の女性と共通しているので、この

書も参考にしたかも知れない。「古今和国新女かゝみ」には、上毛野形名妻・佐介貞俊・大磯の虎がみえているが、同書には、やはり琴水の「列女伝」で採りあげている小宰相のこともみえている。袈裟御前は「春栄百人一首姫鏡」(寛政九年原板・天保八年再版・江戸甘泉堂)にも、「女庭訓御所文庫」(明和四年刻・下河辺拾水著)にもみえている。近世の女訓書を分類してみると、その素材には(一)中国人を素材とした唐のものと、(二)日本人を素材とした本朝もの(『和国新女かゝみ』など)と、(三)日中両国人を素材とした和漢ものがある。また、その内容には、(一)教訓や作法を中心としたものと、史上の人物を中心としたものと、(二)を混合したものがある。さらに、その作者から見ると、(一)男性によって書かれたもの(中村惕齋『比売鑑』など)と、(二)女性によって書かれたもの(田むらよし尼女『四季用文章』・林蘭女『女教文章鑑』など)とがある。なお、その文体には、(一)漢文のものと、(二)仮名文のものと、(三)和漢混用のものがある。琴水の書は、素材では(二)、内容でも(二)、作者でも(二)、文体では(三)に相当する。

七

以上によって、白川琴水の思想をうかがうと、彼女の孝貞とは、人間の自然に発する親に対する愛や夫に対する愛が、礼を通じて表現されると孝となり、義を通じて表現されると貞となるというのである。つまり強い儒教的な倫理史観によってささえられているが、しかし、その礼も義も、やがて、皇室への礼や国家への義によってたかめられ

ると意識するようになっていく。しかし、英学を学び、油絵を書いた彼女にも、まだ、文明史論的な思想への心酔はみられないのである。ただ、これまでに孝女・貞女が、親や夫への犠牲的奉仕を至孝としたのに対して、礼とか義を知るための理性を要求しているのである。この知性開発の要求こそ、本教科書の新しい主張なのである。彼女が学び、かつ、奉職した京都の女学校は、近代的な学校として設置されたのである。その創立は、明治五年四月十四日(一八七二年五月二十日)で、順序からいうと同年二月創立の東京女学校に次ぎ、日本二番目の女学校である。場所は、京都市土手町通り丸太町旧岩倉邸内⁽⁴⁹⁾で、はじめ華族・士族の子女を入学させたが、やがて庶民の子女の入学も認めた。英語を主要科目としたので、「新英学校」と称し、また、和洋女紅を教える女紅場を附設していた。教師は、青木寅之助・三浦貫一・英人ホルンビー・イーバンス(Hornby Evans)⁽⁵⁰⁾夫妻らで、女紅場の教師は、梅田雲濱の妻千代や女ぬいらであった。福沢諭吉は、明治五年五月に、この学校を見て、「英語を学び、女工を稽古する女兒百三十人余、七・八歳より十三・四歳、華士族の子もあり、商工平民の娘もあり、各貧富に従って紅粉を装ひ、衣裳を着け、其装束くして華ならず」といい、さらに、「其温和柔順の天稟を以て、朝夕英国の教師に親炙し、其学芸を伝習し、其言行を聞知し、愚痴固陋の旧習を脱して、独立自主の氣に浸潤することあらば、数年の後、全国無量の幸福を致すこと、今より期して待つべきなり」ともいっている⁽⁵¹⁾。しかし、諭吉の「被仰出書」にみられるような意図⁽⁵²⁾が挫折したとともに、

京都女学校も、文明思想から国粹思想へと転換をはじめた。つまり、諭吉の期待とはしだいに隔離して行くのである。この年六月三日には、明治天皇も行幸され、この学校に強い関心をしめされ、明治七年六月十一日には、校名を改めて「英女学校」といい、珠算や習字も教科目に加わえることにしたが、明治九年には英学偏重を改めて和漢学を兼修させることとし、校名を「女学校」と改めたのである。この学校は、皇室や政府も重視し、明治天皇は、十年二月一日に再び行幸され、太政大臣三條實美も、明治十年二月十三日に視察している。琴水の女学生・教師時代の校長は、塩津貫一郎といい、校内の充実につとめたが、礼法・写生画・絃歌・香道・插花の教育にもつとめ、ついに、英語は一科目として教えるにとどめるようにした。同校の明治九年から十四年までの教育を総括して、「本期は洋学反動の思想湧起し来り、漸く普通学に力を致すの機運に向へるが故に、先づ給費規則を制定し、普通学の普及を図り、師範科を置き、貸費の法を設け、以て府下小学教員養成の機関となし、一面には益々本邦固有の女徳を涵養するに務め、一面には英語科を学科中の一部分と為すに至れり」といわれている。⁽⁵³⁾

この時期に、琴水の「本朝形史列女伝」が書かれているのである。したがって、彼女の思想が、日本固有の女徳を顕彰し、女兒教化の資としようとしていることは、時代の風潮の然らしめるところである。彼女は稿本ができると、宮内省へ献じ、宮内省からは、その挿画も提出するよう求められたといわれる。その刊本は、宮内庁へ献本されたよう⁽⁵⁴⁾で、女子学習院本（焼失）は、宮内庁から廻ったものでないかとも

思われる。女訓書は江戸時代以降、数多く刊行されている。しかし、彼女の女訓書には、教材が精選されていて、彼女の史論が一貫していることは、従来の雑纂類と比較にならないほど、筋が通っている。すなわち、孝とは「礼」、忠とは「義」がたらぬけていなくては、眞の孝女でも貞女でもないと言っているのである。これは、英学を修めた彼女が、儒教論理を合理的に解釈し、自分なりに体系化しようとしているもので、しかも、これは、近代国家を成立の方向にむかわせようとしているひとつの思想として注目される。

八

最後に、本書の教科書史上の地位について述べたい。本書ははじめ、「本朝形史」といったが、書肆の意見で「列女伝」という表題を加わえたという例でいっているように、その体裁は列伝体である。そうして、その分類は、道徳的規範によって分類されたもので、社会的身分などによって分類されたものではない。⁽⁵⁴⁾ 本書は、女性によって書かれた数少ない書である。従来、多くの列女伝が男子によって編述されているが、それらは、男性に都合のよい三從七去を中心思想とするものである。⁽⁵⁵⁾ しかし、女性によって書かれた本書は、女性の言動に、礼と義という筋を通そうとするもので、男尊女卑の思想が稀薄化している。⁽⁵⁶⁾ また、本書は、その範囲を本朝と限定して、中国の烈女を省いていること⁽⁵⁷⁾でもわかるように、その思想が儒教思想であるといっても、日本化された思想である。このように、本書は、従来の女訓書の系列に入る

べきものであるとしても、また、近代における修身書としての新しい方向を切り開いたものでもある。近代の女子修身書についてみると、明治十年頃までは、まだみるべきものがなかったが、明治十年に西坂成一の「小学必読教女軌範」・松本万年標註の「劉向烈女伝」、十一年に阿部弘国の「女子修身訓」などがあらわれている。その翌十二年に琴水の「本朝彤史列女伝」が出るのである。この本の出た翌年、すなわち十三年には、久松定憲の「女学読本」、善積順蔵の「女訓嫁入道具」、石川県第一女子師範学校の「女のしつけ」、千河岸貫一の「小学必携女子修身訓蒙」などが、出ているのである。⁽⁵⁸⁾なぜ、ここへきて女訓書が急にあらわれたのであろうか。それは、明治十一年の夏から秋にかけて、中部地方を巡幸された明治天皇が、侍講元田永孚に命じて「教学大旨」を起草させられたが、そのなかで、「去秋、各県ノ学校ヲ巡覧シ、親シク生徒ノ藝業ヲ驗スルニ、或ハ農商ノ子弟ニシテ、其ノ説ク所、多クハ高尚ノ空論ノミ。甚キニ至テハ、善ク洋語ヲ言フト雖ドモ、之ヲ邦語ニ訳スルコト能ハズ。此輩、他日業卒リ家ニ帰ルトモ、再タヒ本業ニ就キ難ク、又高尚ノ空論ニテハ官ト為ルモ、無用ナルベシ。」といっている。⁽⁵⁹⁾こうした文明主義に対する反動勢力が抬頭しようとする際に、琴水の列女伝が出たのである。しかも、それは、宮内省へ提出されたのである。やがて、元田は、明治十五年に、「幼学綱要」を編集し、それは、宮内省を通じて頒布された。その徳目は、孝行・貞操など二〇徳目より成っている。⁽⁶⁰⁾そうして、明治十七年になると、宮内省は、西村茂樹に「婦女鑑」を編集させ、華族女学校で使用

させるが、この華族女学校が、後の女子学習院である。その意味で、第二次大戦で焼失するまで、本書が女子学習院に保存されていた事実は注目される。⁽⁶¹⁾

註

- (1) 「日本の女学」一八一—一九(明治二二・二・三) 白川琴水(妾思)・東大明治文庫、「女学新誌」一九(明治一八・三・二五) 清少納言摺簾図「白川琴水・東大明治文庫・昭和女子大近代文学室・明治大学図書館、「淑女」一一〇本朝彤氏自序・白川琴水女子幸子・列伝孝女のこと
- (2) 昭和五十八年十一月十日筆者宛書翰
- (3) 女子学習院編「女流著作解題」(昭和五三年六月・日本図書センター復製本) 四八一頁・五三二頁・五四八頁)
- (4) これは「本朝彤史列女伝」の誤りである。「高山市史」下巻(三八五頁)も同様であり、市史は、さらに「琴水小稿」も、「琴水詩集」としている。琴水の生家で成長された白川継紹先生が編集委員の一人であった。「斐太国大野郡史」下巻(四二五頁)も、その詩集を刊行すといひ、書名をしるしていない。さらに、考証厳密な史家として知られた岡村利平氏も、「改版飛騨山川」(一三三頁)で「日本烈女伝」としており、これまで琴水が郷里の人に、あまり深く理解されていない。
- (5) 陳鴻浩「日本同人詩選」巻三・一八裏—二〇表
- (6) 関々子「典籍漫筆(一一)・日本古書通信・一三〇号。昭和一五。この号は、現在、日本大学本部図書館蔵に所蔵されている。国会図書館(上野図書館旧蔵)にはない。関々子とは森銃三氏の筆名である。
- (7) 発表「白川琴水について」・昭和五十八年十月二十三日・飛騨史学会第五回大会(於高山市民文化会館)

- (8) 「東瀛詩選」四〇卷・補遺四卷・一六冊(宮内庁書陵部蔵・函名・国五一二号)
- (9) 清史稿・四八八・列伝二六九・儒林伝三・俞樾伝、同書に、「日本文士、有来執業門下者」とある。
- (10) 「東瀛詩選」の評論のみを集めた俞樾撰「東瀛詩紀」二巻は「春在堂全集」第九六・七冊に収められている。
- (11) 水上珍亮(蘆秋)編「日本閨媛吟藻」・上下二巻(国会図書館蔵・六七四九)は、明治十三年四月二十六日合刻・発行書肆日本橋須原屋茂兵衛他・明治十三年二月江戸で自序・張(梁川)紅蘭や江馬細香ら全国五十四人の女流詩人の詩を集めたもので、琴水の詩は、「白川琴水・名幸・字友之・飛駝人」と注し、下巻の末尾にある。すでに本文に載せた圀上椿履図・清少納言寧簾図・紅絃餘唱(花粉々・花モ雪モ・妾思・黒髪ノ・春雨―春雨ニ・杜鵑啼―何方へ)のほか、新年作与友人分韻得青字、追次高啓之韵(二首)秋日書懷の五詩を収めている。会田範治氏編「近世女流文人伝」(二一・二二頁)引用の詩は、これより採録したものである。
- (12) 「東瀛詩選」と「閨媛吟藻」とは若干ちがいがあり、例えば、前者の「清少納言寧簾図」に、「嫌他小慧愆半生」が、後者では「三寸彫算能模写曲」となっている類である。(近世女流文人伝・二三頁)
- (13) この詩は「花は紛々、雪は霏々。清香払来するも、衣を沾さず。妾は郎を待つも、郎は待つや否や。昨日の春色も、今日は違ふ。園池水寒く、衾(寝衣)凍らんと欲す。憐むべし、鴛鴦合歡の夢。一声聞断す、半夜の鐘。疎轂忽ち向い、枕辺に送る。情緒纏綿、乱れて糸の如し、幾行の紅涙、肌を灑ぎ泳る。身は死すべく、愛は割くべからず。浮生徒頭、一条の葛。」と訓み、「花も雪も」という歌語を訳したものである。
- (14) この詩は、「妾の思、紛紜として、髪は乱れるが如し。髪は乱るるも、なお理むべし。妾の思、紛紜として断つべからず。相見ること多ければ、すなわち別れもまた多し。雙枕 雙枕 汝をいかんせん。孤衾擁し来り、いささか相伴う。無情の鐘声、半夜に過ぎ。昨夢、今朝再び結び難し。唯恐る、昨日の鬢、雪となるを。」と訓み、長唄「黒髪」の直訳である。
- (15) この詩は、「春雨、その濛たる、鶯の棠を湿おす、梅花の枝上、羽もまた香し。憐むべし、情の切なる、梅の遺に恋々として別れるに忍びざるを。鶯もまた妾に似、郎はまた梅なり。鶯の宿る梅、何時にか開かんか」と訓み、端唄「春雨」の漢訳詩である。
- (16) この詩は「杜鵑啼き、何処に之くか。夏山は朦朧として多くに岐る。幾度も啼きて、紅閨の夢を破る。正に是れ、遠人のいまだ帰らざる時、午夜の酒醒めるも、消息なし。暁の鴉の数聲、残月仄なり。」と訓み、俗語「何方へ」の漢訳詩である。
- (17) 久保天髓(得二)「茶前酒後」巻一・昭和四・開明堂刊(函二〇五―号二九六)七裏―八表
- (18) 陳鴻浩「日本同人詩選」巻三・一八裏―二〇表
- (19) 關州は飛州を指すもので、全国という意味ではない。
- (20) 琴水の女青木穠子。和歌に長じ、大正七年勅題予選に入る。名古屋市短歌会館寄贈(名古屋市教育局教育委員会管理)。「穠子遺稿」がある。
- (21) 久保得二「茶前酒後」巻一・七裏―九表
- (22) 前同書・同巻・五表―六裏
- (23) 赤田誠軒が高山を去ったのは、高山県知事梅村失脚後のことで、梅村排斥に成功したけれども、その後任県知事宮原積をも排斥した結果である。
- (24) 願生寺は、天正以前は、飛騨国大野郡白川郷海塩村にあり、その祖先

を千葉氏といい、(刊本飛騨遺業合府・二二頁)、文久二年(一八六二)の琴水の画稿には「千葉氏幸」とある。明治になって白川性を名乗ったものである。

(25) 高山市史・下巻・三七六頁

(26) 伊藤信氏「濃飛文教史」四四三頁・同書は筆者も若い時協力している。(序文)

(27) 白川慈弁の死については諸説がある。すなわち、(一)慈弁の父慈攝の筆になる「和漢年契」(願生寺藏)には、「明治十年九月一日、慈弁鹿兒島ニ於テ、賊ノ流丸ニ中リ死亡(三十二年七ヶ月)」(第四八葉)とある。ところが、(二)南條文雄の「懷旧録」(平凡社版東洋文庫)には、「それ(白川慈弁の死)は、英京ロンドンの客舎に送られた「明教新誌」によって知ったことであるが、概略を言うところである。明治十年、西郷南洲の征韓論の破綻から九州西南の地は戦乱の巷と化した。そこで東本願寺靈濟院連枝は法主代理として九州の地へ慰問使に向かった。そのとき随行として会計方を司どっていたのは白川慈弁君であった。さて、西郷方の旗幟振わず、さすがの南洲も城山に包囲されてからはとみに形勢が変わって来た。どういふ都合からか連枝の一行にも危険が迫って来て、鹿兒島付近を逃げ延びねばならぬことになった。そこで小舟を雇って、いよいよ岸を離れようとするとき、『待て!』と一行を呼びとめた者があった。ふり返ってみると西郷方の落武者らしい。言うところはその舟を貸せというのだ。これは東本願寺のご連枝であると言っても、薩摩隼人の落武者には通じない。ぐずぐずしていると舟ごと沈めるという乱暴な挨拶にやむなく一行は舟を下りた。そのとき慰問金を入れた鞆を抱えてまっ先に下りたのは白川君であった。それをあんまり大事そうに持っていたものだから、暴客たちは不思議に思っ『それは何だ、一応検め

る』といい出した。『イヤ、ならん』と拒む。その争いが漸次嵩じて、ついに暴客の兇刃に斃れたというのであった。負けぬ氣の一徹なところは、どうもそんなことのありそうな人であった。私にはどちらかといえば親友でないかも知れないが、京都時代にはよく料理屋へ伴われて行かれ、飲めもしない酒を無理に飲まされたころの思い出にはやはりなつかしいものがあつた。後年私が法王の随行をして鹿兒島へ行ったとき、当年の白川君のことを思い出して、わざわざ法王に彼の苦むした墓へ参つてもらつたことがあつたが、強情一徹な中にも豊かな情味をもつたその人の昔をしのんで低徊久しうしたことがあつた。』(八〇・八一ページ)というのである。さらに、(三)岡村利平氏の「飛騨編年史要」に「九月上旬、東本願寺連枝靈壽院勝縁、鹿兒島に入り門徒を論さんとし、渥美契縁・白川慈弁随ふ。偶ま賊軍(西郷隆盛の部兵)来襲して、勝縁、契縁等身を以て遁れしも、慈弁以下六名之に死す。慈弁は飛騨国下岡本願生寺の僧なり。』(四五七・四五八ページ)というものである。なお、久保天髓の「茶前酒後」巻一には、「琴水兄慈弁、頗負氣骨、亦粗解韻語、丁丑之乱、随本願寺連枝靈壽院勝縁、入鹿兒島、慰撫門徒、一夕賊數十人来襲、勝縁与渥美契縁等、挺身僅免、而慈弁等六人、逐斃于兇刃下」とある。

(28) 琴水小稿序 自垣武奠鼎于平安、而其文物典章之盛、固不須道也、山水明麗、与人物都雅、亦固不須道也、而其尤可誇耀者、其唯彤管之煒為然、吾嘗説国史、当延喜天曆之際、以西施南威之美、兼謝女曹姑之才者、若紫女之於源語、清氏之於枕草紙、赤染之於榮華、大貳三位之於狹衣是也、率皆以架空憑虛之筆、能享佳人吉士之情、文采葩流、措詞婉約、使鬚眉丈夫、俛首踐巡、乞降之不遑也、但所撰著、往往涉中興、弗能靡贈芍藥蘭之嫌焉、比諸謝女曹姑、筆墨高華、心腸如水者、吾不知其軒輊何

如也、独嵯峨皇女、有智子内親王、以肅雅之懿親、覃思文藝、孤鳥寒花一聯、久已膾炙人口、而親王此時年才十有七云、今吾門亦有与親王相比肩不多遜者焉何也、琴水白川女史則其人也、女史飛驒高山之産、其地萬山環抱、僻在一偏、乏良師益友、女史懷之、乃弓鞋千里、負笈浪速、就学西籍、粗通其義、既而欽慕平安人文尤熾、客歲來寓西京、蠶桑之暇、時來問詩於予、女史才鋒敏妙、凡鳥啼蟲吟、苟有可題咏、輒咄嗟成章、未一裘葛、其詩既哀然、而意匠之工、措詞之麗、与彼孤鳥寒花之句、相儷不多讓、而問其齒則適与親王等、且親王者以厪一聯、擅名当世、女史則今既獲斯五十餘篇、豈有才力藻思勝乎親王者然邪、然則以女史之才藻貞淑、益勉弗懈、則不唯駕軼紫女清氏、亦当与曹姑謝女、並驅而奮馳也、吾聞昔者上東門院、甚好文藝、召女史有才藻者、置之左右、以備顧問、方今右文、俊父在官、名一藝者、皆蒙被録、況女史才色、加焉以彤管之煒、異日編一部架空之書于湖光月色中邪、将寧簾於雪朝、而解龍顏邪、此二者皆女史所優為、固不待道也、雖然予所望於女史者則異此、曰何也曰親蠶事、曰務紡績、明治九年丙子三月三十又一日識于西京和穀坡僑寓、三溪老人菊地純

(29) 白川慈攝書込「和漢年契」(願生寺藏)第四七葉

(30) 袖川村誌・七三頁

(31) 菊池三溪「本朝彤史序」

(32) 「琴水画帳(七歳女幸)」に次の稚い字で詩がある。

溪梅

溪樹黃昏月 清香統々来

歲寒梅似雪 早芳一朵開

夏目漁家

小艇斜陽落 蒼江炎暑微

蘆州過雨後 晒網柳間扉 琴水女史
(33) 大坪二市(一八二七—一九〇七)は、古城郡養輪村の篤農家であるが、文筆にも親しみ、「農具揃」の著がある。梅村騷動当時は、四二歳である。彼は梅村民政に批判的であった。

(34) 岡村利平氏「飛驒史料・維新前後之一」・七四三頁

(35) 十三歳は、大宝命(養老令)以来結婚が認められていた。この点中田蕙博士も、「大宝令・養老令は、男子にありては十五歳以上、女子十三歳以上を婚姻適齡と定めたり。」といわれている。(日本法制史講義、法制史学会刊本・二二六頁・二七一頁)

(36) 幸女を梅村に仲介した人は、もとより知るべくもないが、近くの上切にある随縁寺一六世善龍(一八三二—一九一五)は、梅村騷動に梵鐘まで破壊されたほど、知事に親近しており、かつ、明治十二年には、二年前、幸の兄慈弁の死んだ鹿兒島へ布教に赴いている人物(飛驒真宗史編纂所報・六—三六頁)なので、あるいは、このあたりを検討してみると、新事実が出るかも知れない。

(37) 菊池三溪「本朝彤史序」。三溪の序文では、「負笈浪速」と高山から浪速へ直行したように記しているが、まず上京して力を蓄え、大阪の集成学校へ入学したのである。

(38) 南條文雄「懷旧録」平凡社版東洋文庫(三五九)・二〇頁

(39) 真宗教学研究所編「近代大谷派年表」三四頁 明治五年三月十一日、慈孝等五名、東本願寺改正掛に任命される。

(40) 前同書・三六頁、明治六年八月、東本願寺寺務所役員決定、副視察に白川慈弁任命される。

(41) 南條文雄「懷旧録」平凡社版東洋文庫(三五九)・七九頁

(42) 拙稿「史学者としての桐山玄豹について」飛驒史学・一

- (43) 桐山義彦「三桐詞葉」二九・三九頁。吟石とは加納氏。慶応四年三月上京遊学(前同書・三一頁)
- (44) 前同書「将廃西京赴支那、留別小華・橘華・琴水諸子」・四二頁
- (45) 名古屋市史(中部経済新聞社版)・三六五頁
- (46) 白川慈攝書込「和漢年契」第四八葉
- (47) 前同書・第四七葉
- (48) 京都府立第一高等女学校「創立六十周年記念沿革略誌」三頁
- (49)(53) 村上俊亮・坂田吉雄「明治文化史・三・教育道德編」二二三頁
- (50) 京都府立第一高等女学校「創立六十周年記念沿革略誌」四頁
- (51) 慶応義塾誌(大正一一)・京都学校の記・七一八頁
- (52) 拙著「学校の歴史」一八三～一八五頁
- (54) 例えば、「全像本朝古今列伝」のごときは、后妃・夫人・孺人・婦人・妻女・妾女・妓女・処女・奇女・幼女というように、社会的身分を主として分類している。
- (55) 例えば、貝原益軒の「和俗童子訓」巻五・教女子法のごときで、同書には、「婦人とは三従の道あり。」「婦人に七去とて悪しき事七つあり。」といている。
- (56) 例えば、鎌田政家の妻の条で、「曾テ聞ク、女ニ、三従ノ訓アリト。只其レ従ト雖モ、焉ソ其ノ不義ニ従フヲ謂ハンヤ」といつている。
- (57) 中国の列女伝を和訳したものの中には、北村季吟訳の「仮名列女伝」のごときがある。また、最近のものには、山崎純一氏の「伝王節婦著『女範捷録』試訳稿」中国文学論叢・八、「曹大家『女誠校勘』訳試稿」中国古典研究・二五(一九八〇・一〇)、「明仁孝文皇后『内訓』校異訳試稿」(上)国際文化研究(一九八二・三)などがある。筆者もまた、内訓については、「明太宗の学校教育政策」のなかで論述している。(近

- 世アジア教育史研究・一九七一・三)六八頁
- (58) 大阪学芸大学教育研究所「教科書文献目録」(一九六四・三)一一三頁
- (59) 拙著「学校の歴史」八〇頁
- (60) 拙著「道徳と歴史」三二頁
- (61) 東京の学習院は、明治十年十月に開校されたが、当初、男子小学・女子小学・男女中学となっていた。十六年には、文部卿の監督から宮内卿の所管となり、十八年九月、女子を離して華族女学校とした。その後、明治三十九年四月、華族女学校を学習院女子部とし、大正七年に、これを女子学習院とした。したがって、宮内省へ献上した琴水の本が、女子学習院に存在した道筋は明かになったといえる。

(本学特任教授・教育学)